浅羽郷土資料館企画展

遺跡でたどる袋井のあゆみ

第4弾

鎌倉～戦国時代の巻

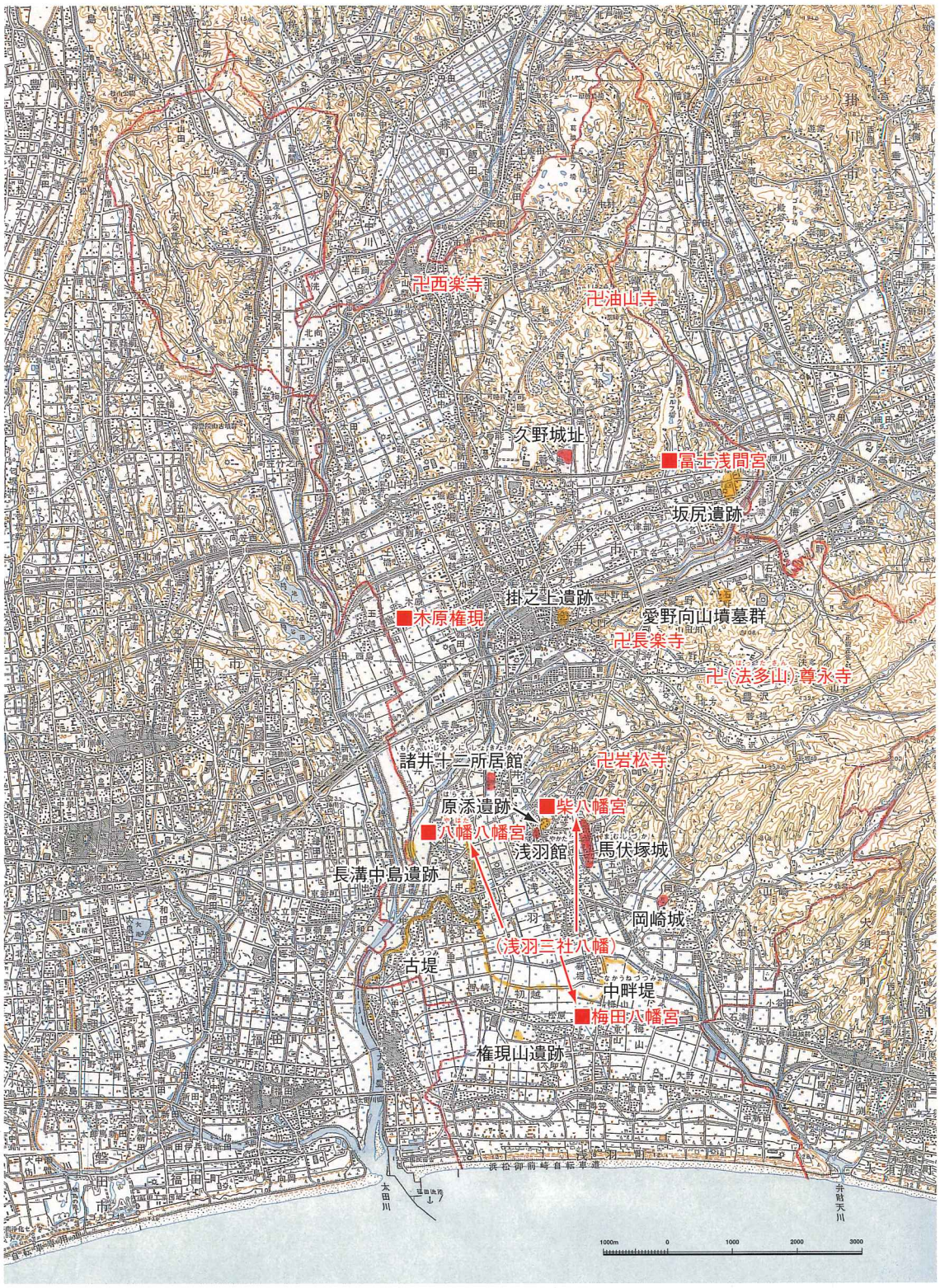
諸井十二所居館

袋井市教育委員会　袋井市立浅羽郷土資料館

遺跡でたどる袋井のあゆみ　－鎌倉～戦国時代の巻－

今回の展示は平成18年からシリーズで開催している、「遺跡でたどる袋井のあゆみ」第４弾です。

市内には藤原氏の氏長者が相伝する（殿下渡領）浅羽荘の現地代官をつとめた浅羽氏の館跡や熊野山領であった山名荘の経営に関する諸井十二所居館・遺跡、原野谷川の水上交通の要所であった国衙領（遠江国衙の直轄領）長溝郷の中島遺跡、中世東海道の要所であった坂尻遺跡をはじめ、戦国時代の城跡には久野城址、馬伏塚城跡、岡崎城跡など、主要な遺跡があり、これらを通じて中世袋井の姿を紹介します。

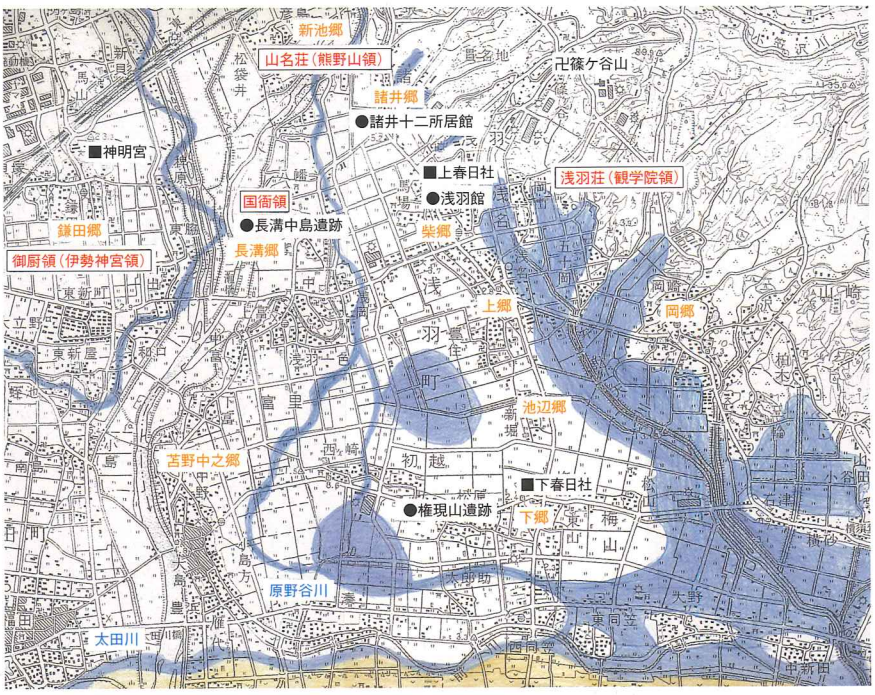


鎌倉～戦国時代の袋井の主要遺跡と社寺

鎌倉時代（700～800年前）の海岸低地周辺のイメージ

小笠山の裾と磐田原台地末端には約6000年前の縄文海進に端を発する水域（ラグーン）が残り、低地を蛇行して流れる太田川・原野谷川は海岸線に延びる厚い砂堤にはばまれ、明応年間（1492～1501）に発生した大規模地震により、福田付近で地盤が沈下するまで、遠州灘に直接注ぐことはできなかったと考えられます。

内陸部に奥深く入り込んだ入江と、両河川流のゆるい流れは運河として舟運を発達させ、遠州の経済・文化の中心をなしました。



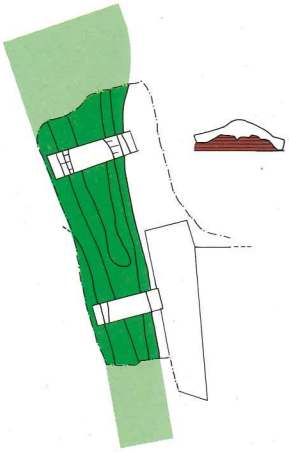
浅羽館（あさばやかた）

平安時代後期（900年前）に成立した浅羽荘の現地荘官、浅羽荘司（しょうじ）の館跡と伝えられてきた場所には東西100ｍ、南北130ｍの範囲で土塁がまわり、浅羽氏の子孫と伝えられる浅羽家には現在も一部が残っています。

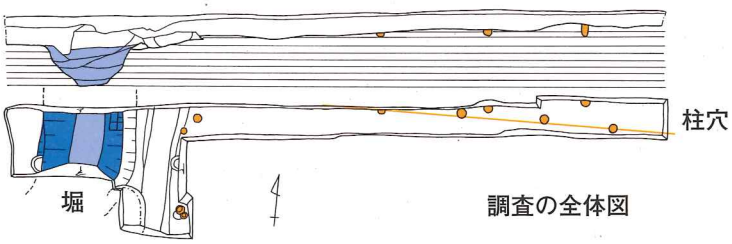
平成12年に初めて行なった調査で、平安時代後期～鎌倉時代に機能していた50ｍ四方の規模を持つ居館の掘の東南隅が確認され、鎌倉時代後期に規模が拡大されたことがわかりました。

掘の断面

館の推定復元



東側の土塁



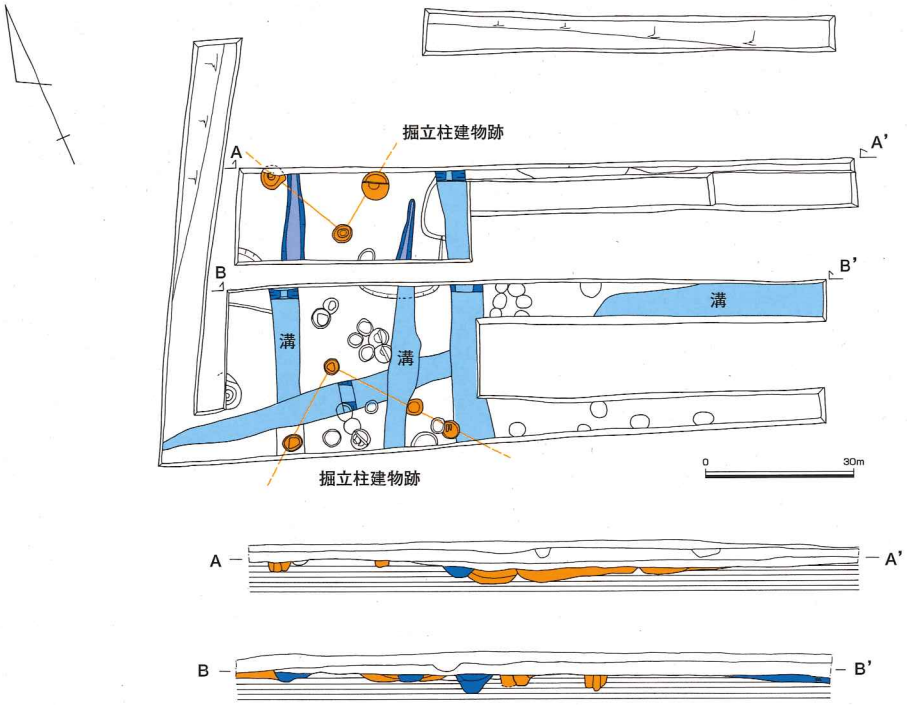
調査の全体図

0　5m

原添遺跡

平成14年の試掘確認調査で鎌倉時代～室町時代の建物跡や溝が発見されました。円明寺の境内からも同時代の建物跡が確認されており、浅羽荘司館に隣接するこの遺跡は、浅羽荘柴郷の開発の一端を教えてくれます。

調査区のようす（西から）



調査区全体図

権現山遺跡

東浅羽地区の砂堤上に築かれた鎌倉時代を中心とする散村集落で、浅羽荘下郷に相当すると考えられます。砂堤の南斜面からはヤマトシジミを主体とする貝塚が発見され、保存状態の良い井戸枠も残されていました。

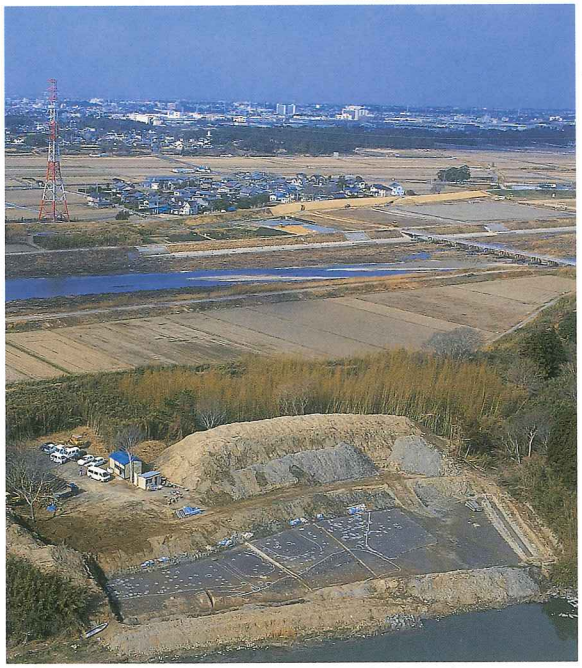
曲物を使用した井戸枠（鎌倉時代）

桶を使用した井戸枠（鎌倉時代）

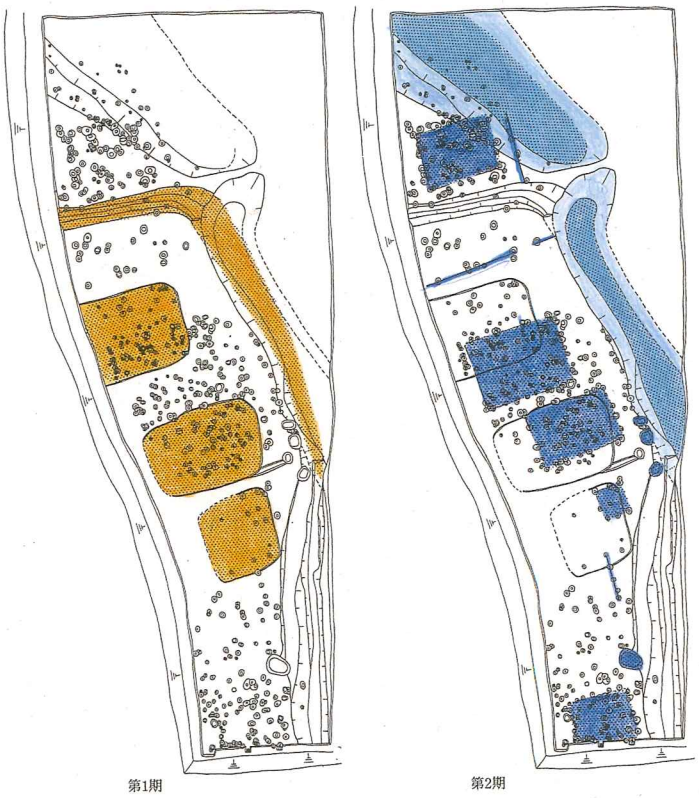
長溝中島遺跡

旧太田川に面したこの遺跡は、舟運によって栄えた遠江国衙領長溝郷の湊であったと考えています。平成９年の発掘調査では12世紀中頃～13世紀前半におよぶ、集落跡とおびただしい、土器類が発掘されました。特に、多くの中国産陶磁器と、瀬戸内の国衙周辺や摂関家領内で主に流通する楠葉産（大阪府枚方市）の瓦器碗が含まれることは特筆されます。

浅羽入江に着いた船からは、川船に荷を積み替え、国衙のある見附や遠江一宮と一体であった蓮花寺門前の森辺りまで、様々な品物が運ばれたことでしょう。



空から見た、長溝中島遺跡



遺構の変遷

Ⅰ期は溝で囲った竪穴式建物（倉庫？）が並び、Ⅱ期は溝の区画内に掘建柱建物群が柵で仕切られ、並んでいます。

同安窯系碗・龍泉窯系碗

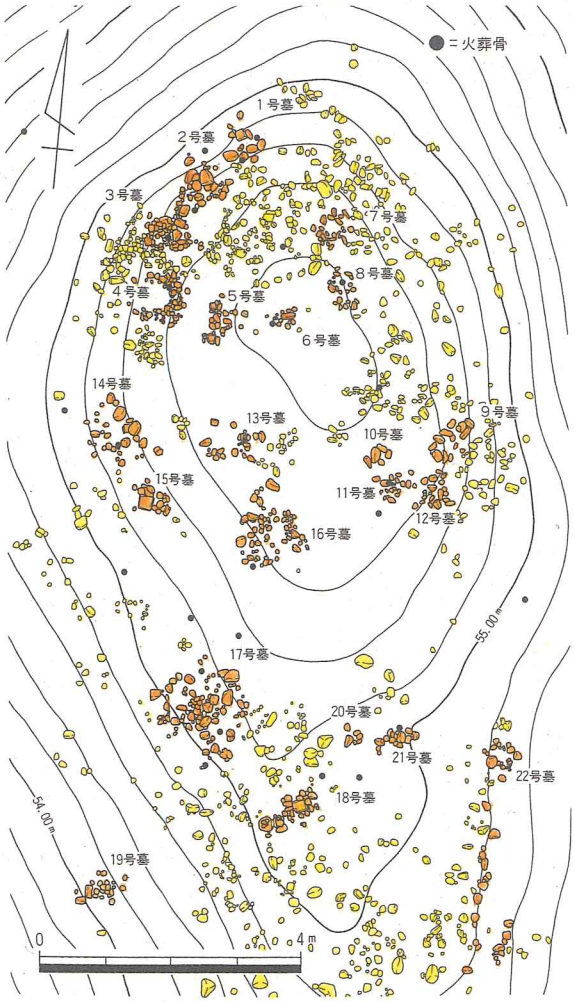
白磁・青白磁

大溝からの出土品

山茶碗・小皿・方口鉢・渥美産陶器・常滑産陶器・伊勢型鍋鍋・砥石など多くの出土品がありました。

愛野向山墳墓群

小笠山段丘の北裾の尾根筋に営まれた、15世紀を中心とした南北朝・室町時代に築かれた集石墓群です。西側の谷は「寺の谷」と呼ばれ、その谷口には北朝井伊家につながる石野・貫名氏の菩提寺「正覚寺」があったと伝えており、この墓地の成立と関わっていた可能性があります。



愛野向山墳墓群分布図

丘陵の頂きを中心として、22基以上の集石墓が存在した。墓は礫が散在するもの、密集するもの、礫により囲いを造るものの３タイプがありました。

掛之上遺跡

原野谷川西岸の河岸段丘上に立地する弥生時代から続く遺跡で、古代・中世の東海道にも隣接し、交通の要衝でした。

この遺跡から鎌倉時代初めの墓が見つかり、和鏡が納められていました。

中世墓から出土した和鏡（鎌倉時代／11.5cm）

愛野向山墳墓の蔵骨器

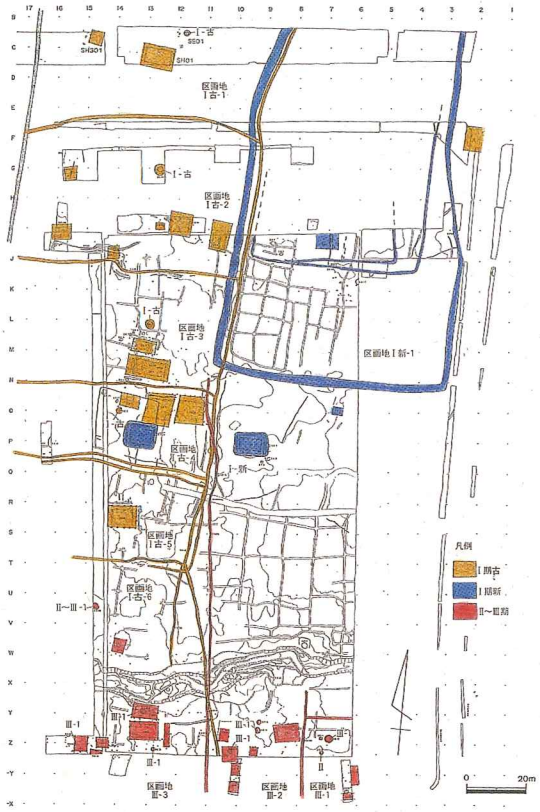
（左）古瀬戸瓶子（15世紀前半）　（中）志戸呂徳利（19世紀）
（右）信楽甕（15世紀）

坂尻遺跡

坂尻遺跡は古代・中世東海道と原野谷川が隣接する交通の要衝で、古墳時代から集落が続いています。

発掘調査で平安時代末～鎌倉時代の３時期にわたる集落構成の変遷が明らかとなり、Ⅰ期古段階には南北に設定された区画溝を基本に、西側に区画溝を設定し屋敷地を設け、Ⅰ期新段階になると区画溝の東側に神社と推定される祭祀空間と「まじない」の場所が設けられます。

Ⅱ・Ⅲ期は東海道に面した南側に屋敷地が移動しており、中世宿駅関連の建物であった可能性が考えられます。



坂尻遺跡　平安末～鎌倉時代の集落構成

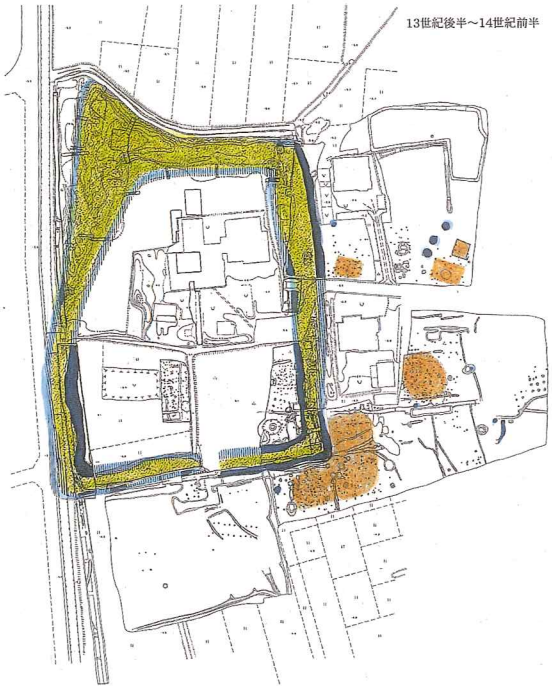
裏鬼門の「まじない」に使われた山茶碗（坂尻遺跡）

鎌倉時代になり、東北の隅を鬼門として忌む風習が陰陽道の影響で広がると、これとは反対方向（南西）を「裏鬼門」として、忌む習慣がわが国で起こりました。この墨書土器群は神社？の「裏鬼門」に相当する区画溝の隅から出土しており、これを封じるための「まじない」に使用されたと思われます。

諸井十二所居館（もろいじゅうにしょきょかん）

原野谷川に面したこの遺跡は、平安時代後期に成立した熊野山領山名荘（やまなのしょう）の南端にあたり、白河・鳥羽・後白河の三上皇が、崇敬篤い寺社に寄付した領地の一つで「三代起請地（さんだいきしょうち）」と呼ばれています。

熊野十二所権現の社殿を中心とする諸井郷の管理施設からはじまったと考えられ、13世紀中頃には土塁をはさんで、内溝と外溝がまわる東西85ｍ、南北120ｍの本格的な中世居館に整備され、その後、断続しながら、現在も曹洞宗心宗院（しんそういん）として続いています。



成立段階の十二所居館とその周辺

空から見た十二所居館

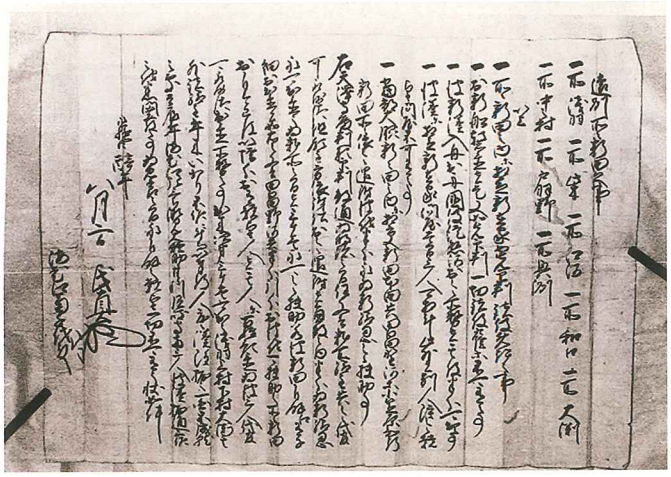
十二所居館の遺物（戦国時代）

戦国時代の海岸低地と新田開発の関係

16世紀後半頃の海岸低地の地形を復元しました。この頃の原野谷川と太田川は合流せず（両河川は17世紀初頭に人工的に合流されました）、原野谷川は大きく蛇行しながら海岸砂堤の内側に沿って東へと流れ、約6000年前の縄文海進の名残の潟湖に注ぎ込んでいました。西大谷川も、後の横須賀城下の真ん中を西へと流れ潟湖に注ぎ込んでいます。

潟湖の最も奥まったところには、今川家の重臣遠江小笠原氏の居館と城（馬伏塚城）が置かれ、流域の新田開発に深く関与していました。□内の地名は永禄３年（1560）の判物に登場する新田の場所です。

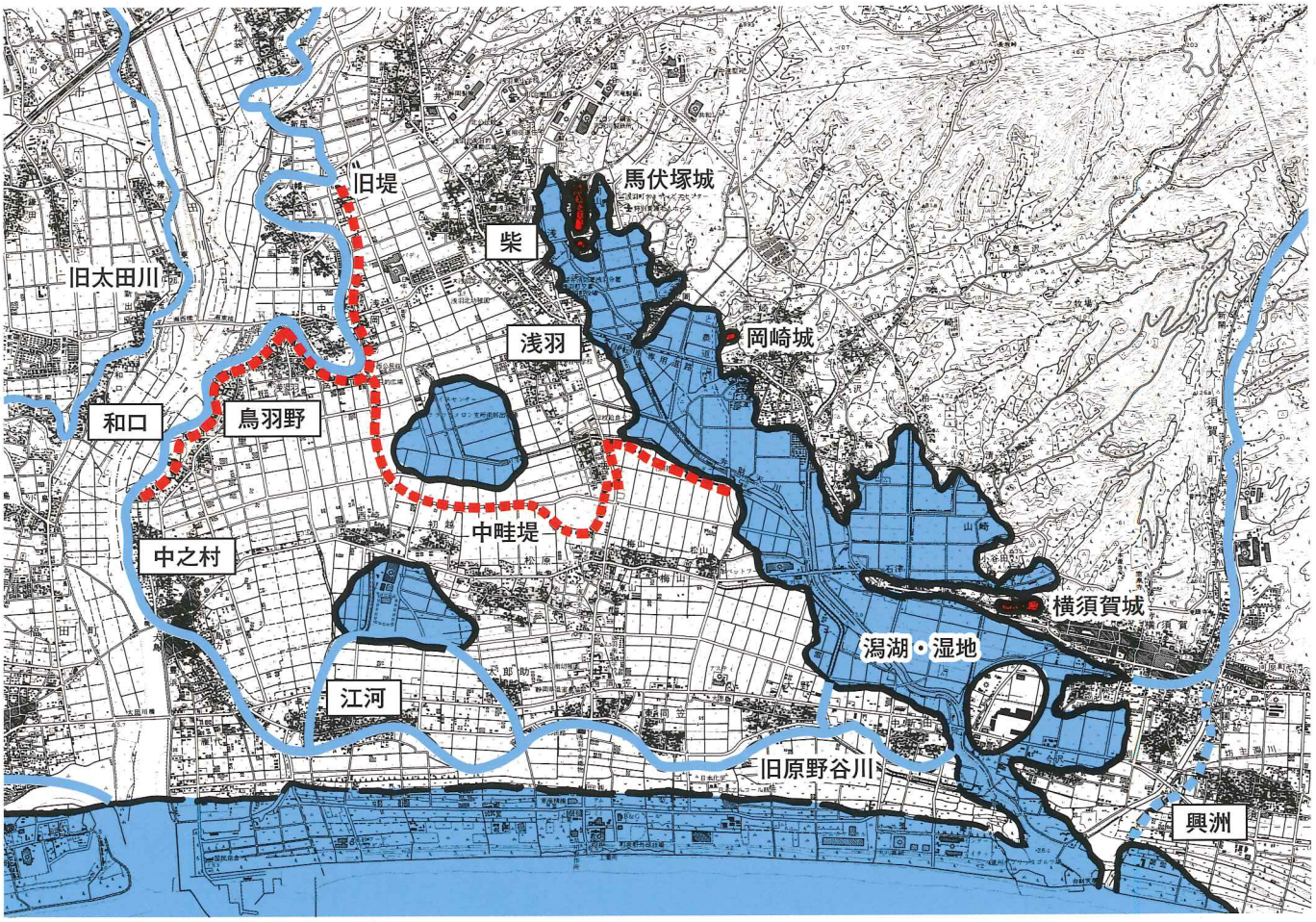
この復元図で注目したいのは、潟湖の入口が砂堤の発達によって意外と狭く、大潮や台風時には高潮災害の危険が高い地形であったということです。



今川氏真判物　海老江文書（広島大学文学部国史学教室所蔵）

今川氏による新田開発を示す史料が永禄３年（1560）７月20日付けと、翌年８月２日付けの２通残され、共に今川氏真から開発に功績のあった海老江菊千代へ宛てたもので、これは後者の方です。

ここには新田として浅羽・柴・江川・和口・大淵・中之村・鳥羽野・興洲の名が挙げられ、悪水を吐き出すため湊を掘り通し、これが成功して不作地が開発可能になったことが記されています。

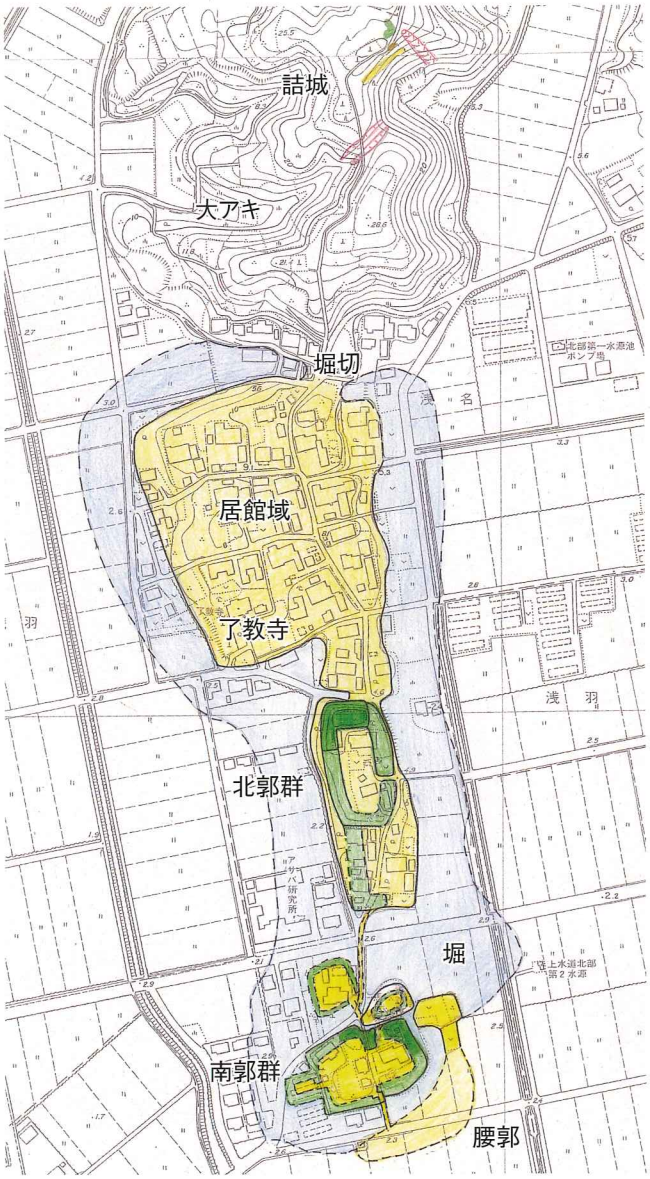


戦国時代の海岸低地と新田開発の関係

古堤（ふるづつみ）の土層断面（富里地区）
16世紀代に今川氏による旧原野谷川の治水事業として築堤されたものと考えています

中畦堤（なかうねづつみ）の痕跡（梅山地区／現在のアクアパーク敷地内）
浅羽荘の開発に伴い14世紀には築堤された可能性があり、堤の北を上郷（輪）、南を下郷（輪）と呼びました

馬伏塚城（まむしづかじょう）



馬伏塚城復元図

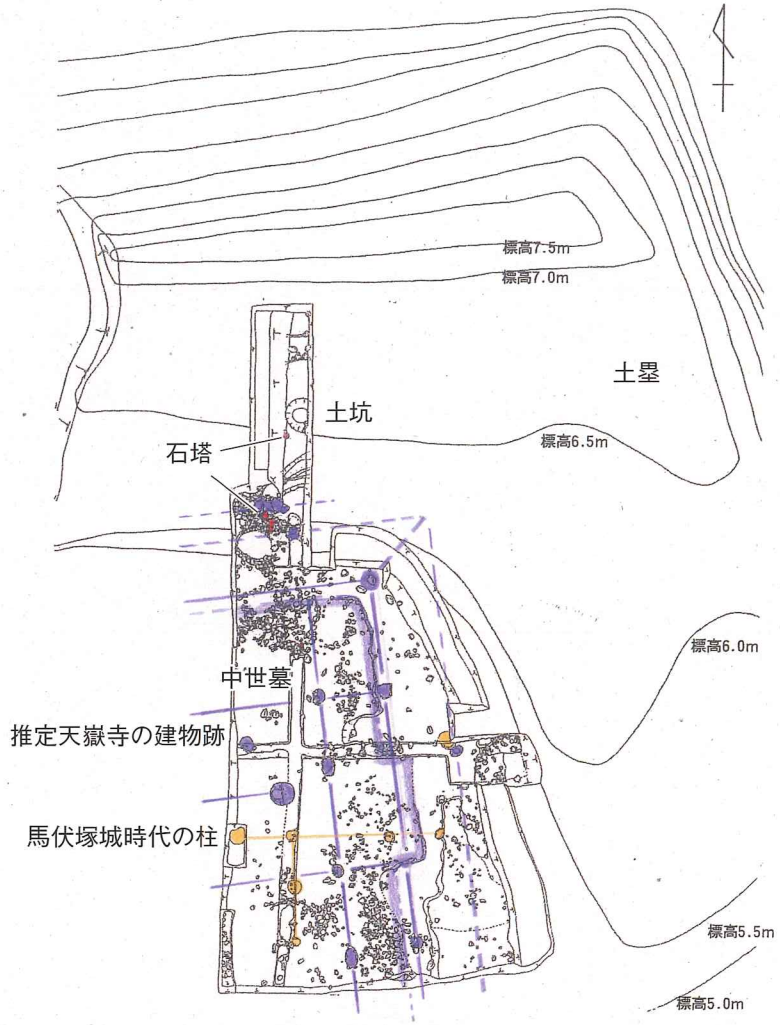
掛川市土方（旧大東町）の高天神城とともに遠州を代表する戦国時代の城で、今川氏時代には、南遠地域の要として、守将に重臣の小笠原氏が置かれました。この頃は、麓の居館と背後の詰城（呑吉山）からなる構造であったと考えられます。

永禄12年（1569）に徳川家康が遠江に侵攻した後、小笠原氏は徳川方に下りますが駿河に侵攻した武田信玄との間で、遠江の支配をめぐって徳川・武田両氏の抗争が展開されました。

天正２年（1574）６月には遠州の要となる高天神城攻略のため、馬伏塚城は武田勝頼の攻撃により落城しますが、徳川家康は即刻取り返し、大須賀康高に命じて高天神城奪還の前線基地として大改造を加え、入江を活かし、大規模な土塁を廻らす本格的な水城となりました。

馬伏塚城の構造

小笠原時代のⅠ期は方形区画を持つ居館域と背後の詰城からなり、天正期以降のⅡ期は新たに北郭群と南郭群（本丸）が整備されたと推定しています。
南郭群の腰郭は入江に面した船着場と倉庫の機能を持っていたと考えています。



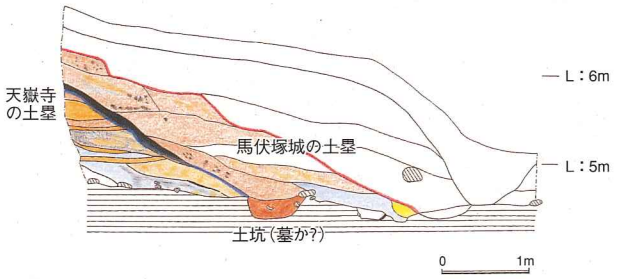
本郭発掘調査実測図

天正期（Ⅱ期）馬伏塚城の下層から、小笠原氏の菩提寺と推定される天嶽寺の建物と、背後の盛土からは墓と考えられる土坑や一石五輪塔が見つかり、その表面は火災により赤く焼けていました。

本郭発掘調査の様子

推定天嶽寺出土信楽壺（16世紀末）

住宅建設に伴い昭和42年に出土した完形品。壺は消費地での出土が極端に少なく、墳墓から発見されるものが圧倒的で、最初から蔵骨器として生産された可能性があります。小笠原氏の蔵骨器ではないでしょうか



土墨土層断面図

天嶽寺のものと推定される盛土にさらに盛土を加え、馬伏塚城の土墨が築かれていました

馬伏塚城跡（推定天嶽寺）・諸井墳墓群の石塔

15～16世紀の石塔群　森砂岩を主体とする一石五輪塔、宝篋印塔。手前側の10基分が馬伏塚城のものです。表面に火を受けて変色しています

岡崎城

徳川家康が天正２年（1574）以降に入江のほとりに築いた高天神城奪還の城砦群（馬伏塚城・横須賀城）の一つと考えられます。

この城の周辺には当時、北・西・南の三方に水域がせまり、東側だけが陸続きとなる要害の地でした。発掘調査は行なわれていませんが、主郭を取り巻く分厚い折土塁や小口の構造に天正期の徳川系城郭の特徴がみられます。

岡崎城縄張図（水野茂氏提供）

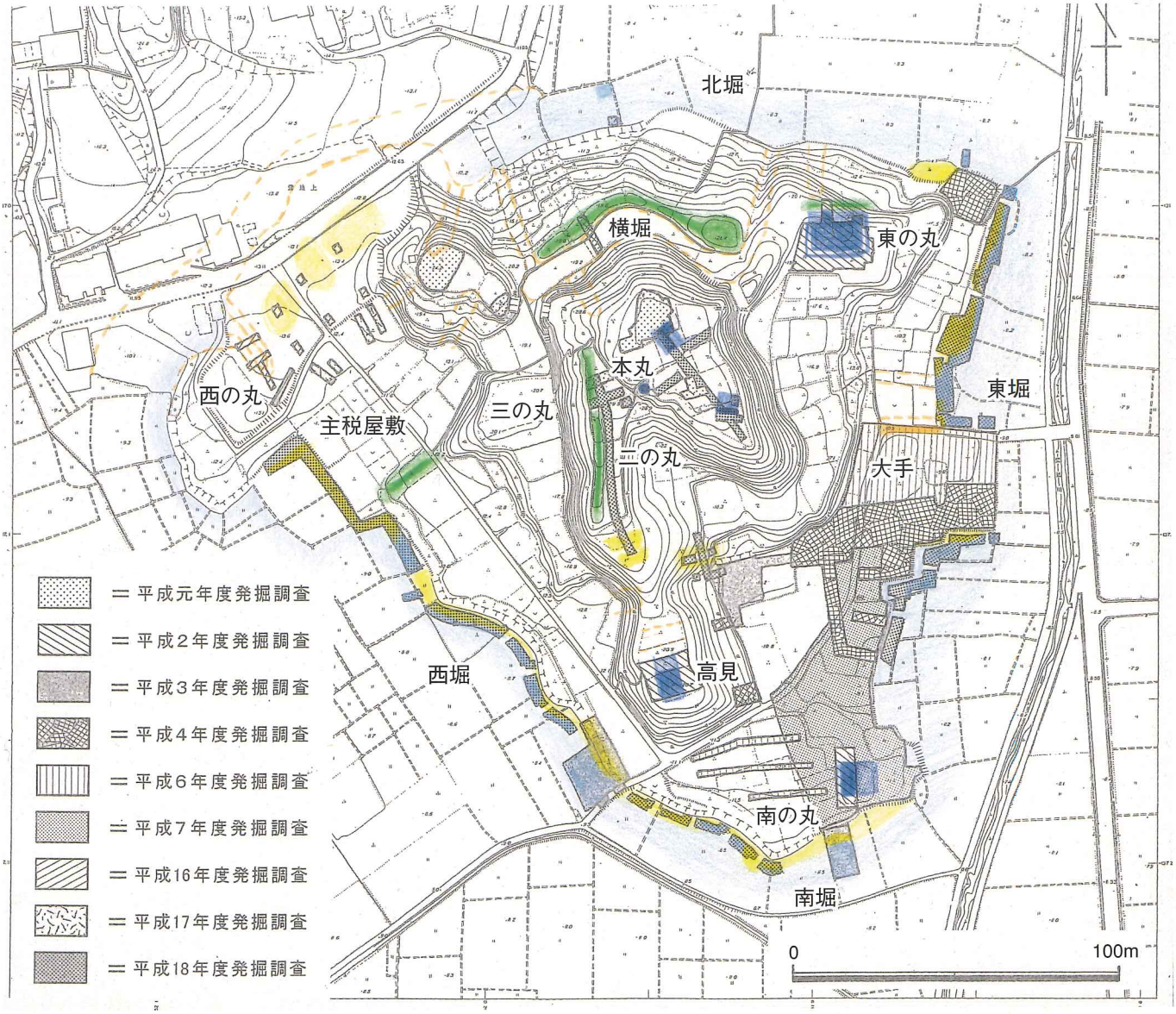
岡崎城全景
周辺の低地や水田はかつて海（入江）でした

堀から小口（虎口）をのぞむ

久野城址

蔵王城とも呼ばれ、明応３年（1494）の今川氏の遠江侵攻時に築かれたと考えられています。城跡は南へ伸びる丘の先端部を利用して築かれ、郭・井戸・土塁・掘切などの旧地形が良く残るのが特徴です。

最初、久野氏が城主でしたが、天正18年（1590）の徳川家康の関東移封に伴って、久野氏が関東へ移ると、豊臣秀吉の家臣、松下之綱が入り、瓦葺の建物を持つ本格的な織豊系城郭に改造しました。関ヶ原の戦いののち、慶長８年（1603）に松下氏が常陸小張へ移り、その後、久野氏がもどりますが、元和５年（1619）に久野氏が紀伊徳川家の祖、頼宣に伴い伊勢田丸城へ移ると、北条氏重が下総の富田から移り、寛永17年（1640）の下総移封後横須賀藩の預かりとなり、正保元年（1644）に廃城となります。



久野城址全体図

久野城址出土の主要瓦（松下氏～北条氏時代）

地山を整形した櫓台（やぐらだい）（松下時代）

本丸の南端から、地山を方形に削りだした建物基壇がみつかりました

遺跡でたどる袋井のあゆみ　第４弾　鎌倉～戦国時代の巻

編集　袋井市立浅羽郷土資料館　TEL 0538-23-8511

発行　袋井市教育委員会　生涯学習課文化財係

本書は資料館企画展（平成20年２月２日～３月16日）展示図録を兼ねた文化財啓蒙資料です